

John Donne の *Songs and Sonnets* における物語

愛の神との契約と代償

鳥養志乃

1. *Songs and Sonnets* の順番と全体としての読み

John Donne (1572-1631) の *Songs and Sonnets* (以下、*SaSs*) は版によって掲載順序が異なる詩群である。20世紀以降も多く研究者が Donne の注釈付詩集を出版しているが、*SaSs* の掲載順序は 1633 年版 *Pomes*、1635 年版、独自の解釈、アルファベット、Dowden 版マニユスクリプトと、版によって参照元が異なっている。このような状況故に、既存の Donne 研究において *SaSs* は全体としての読みが重視されていない詩群でもある。

表) *SaSs* の掲載順序の具体例 (本発表で用いる作品を利用)

	1633	1635	Grierson	Gardner	Showcross	Smith	Redpath 2nd	Dickson	Robinsによる
順番参照元			1635		1633	Alphabet		Dowden	推定創作年
出版年	1633	1635	1912	1965	1967	1971	1983	2007	2010
The Triple Fool	16	10	9	25	16	46	8	15	Earlier 1590s?
Farewell to Love		51	51	47	55	18	45		1592-5?
Love's Usury	14	8	7	18	14	33	13	13	First half of 1590s?
The Broken Heart	6	33	33	24	5	7	22	4	1594?
The Appartion	5	32	32	17	4	3	1	3	1590s?
The Legacy	19	13	12	23	19	26	4	17	Early 1590s?
Love's All	17	11	10	43	17	27	32		1590s?
The Flea	34	1	27	26	36	20	24	36	1590s?
The Ecstasy	36	35	35	31	38	16	35	38	1605-13?
The Dissolution	45	44	44	50	48	14	53	48	?
A Nocturnal upon St. Lucy's Day	2	30		49	58	36	54		1612?

一方、*SaSs* の物語的な読みを示唆する研究も存在する。Dame Helen Gardner は *SaSs* を“cynical generalizations”、“unrequited love”、“mutual love”に分類し、個々の作品の創作推定年を絡めながら 2 部に分けて掲載している。Gardner 版を受け、Theodore Redpath の *SaSs* 第 2 版では、作品を“Satire with bitter and cynical poems”、“courting poems”、“poems expressing greater and greater satisfaction in a love relationship”、“poems of parting and of illness and death”、“a few poems expressing a certain serious frustration which may or may not be resolved in the poem concerned”の分類順で掲載している。赤松佳子は、“Break of Day”、“The Sun Rising”、“The Good-Morrow”に「アルバ」の伝統を見出し、3 作品を順に読む重要性を提唱している。

一方、本研究では *SaSs* の作品を比喻や物語の類似を元に並び替えることで、この詩群が全体で大きな物語的な流れを形成していると主張する。その大きな物語とは、Petrarch 的な恋愛(詩)に否定的な語り手が、心から愛する女性と出会い、一時的な別れを乗り越えるも、彼女の死によって世界に対する価値を見出せなくなり、恋愛を否定する形で冒頭に戻り循環する、という流れである。作品の順番が大きく異なるものの、類似する研究の存在からも、本研究の主張はある程度の客観性が認められるものと考えられる。

本発表では複数の作品を取り上げ、*SaSs* の新たな全体像を示す。特に、語り手の焦点や比喻が少しずつ変化することで作品同士が繋がっていること、そして“Love's Usury”で結んだ愛の神との契約によって、“A Nocturnal on St. Lucy's Day”までに語り手がその代償を支払うことになるという物語的な展開に注目したい。

2. Petrarch 的な恋愛詩への揶揄と愛の神との契約

SaSs の始点であり、この詩群の前半部で語り手が自身の話の体で継続して行っているのが、当時流行していた Petrarch 的な恋愛詩への揶揄である。まず“The Triple Fool”で語り手は、Petrarch 的な悲恋(“loving” 2)を理想とすること、その嘆きの詩(“whining poetry” 2)を創作すること、そしてそれを歌にして愛好すること(“sing my pain” 14)を三重の馬鹿だと貶してみせる(“And I, which was two fools, do so grow three;” 21)。次に“Farewell to Love”で語り手は Petrarch 的な恋愛詩の中でも頻出する愛の神聖(“some deity in love” 2)に着目し、愛の神は始めから偉大なのではなく、詩人達の流行から祀り上げられただけだと冷笑してみせる(“Our desires give them fashion, and so/ As they wax lesser, fall, as they size, grow.” 9-10)。次の“Love's Usury”で語り手は愛の神に強制される Petrarch 的な貞淑で報われない恋よりも一時間の浮気な恋の方がマシだと述べる為に、愛の神に取引を持ち掛ける(“For every hour that thou wilt spare me now,/ I will allow,/ Usurious God of love, twenty to thee,” 1-3)。この契約の中で語り手は浮気な恋の後に自分を愛する女性に耐えてみせると述べるのだが(“Spare me till then,/ I'll bear it, thou she be one that loves me.” 23-4)、実際に *SaSs* の終盤でその約束が果たされることになる。その間も Petrarch 的な恋愛詩への揶揄は続き、“The Broken Heart”では語り手が“Love's Usury”で浮気な恋をしたいと願ったこととして、Petrarch 的な恋愛詩通りに女性が冷たい態度を取ったせいで、彼の心が文字通り打ち砕かれて本気の恋愛が出来な

くなった為だという理屈が展開する(“My rags of heart can like, wish, and adore,/ But after one such love, can love no more.” 31-2)。“The Broken Heart”で心臓が砕かれたことで“The Apparition”では語り手自身の死へと連想がなされ(“When by thy scorn, O murderess, I am dead” 1)、さらに語り手は幽霊となって貞淑であるはずの女性が浮気な存在であることを暴露するという奇想(“Then shall my ghost come to my bed,/ And Thee, feigned vestal, in worse arms shall see.” 4-5)をもって、Petrarch 的な貞淑な女性像を否定する。“The Apparition”の語り手の死を元にして、“The Legacy”では彼自身の心臓を愛する女性に遺産として贈るという奇想が展開する(“When I felt me die,/ I bid me send my heart, when I was gone” 9-10)。そして彼の体の中で発見された、色付きで、角を持つ心臓らしきもの(“Yet I found something like a heart,/ But colours it, and corners had” 17-8)が彼女の物であった(“twas thine” 24)という結びをもって、語り手は再度、Petrarch 的な貞淑な女性像を否定してみせる。このように SaSs の複数の作品間で語り手は手法を少しずつ変化させながら、自身の経験の体で何度も Petrarch 的な恋愛詩を揶揄しているのである。

3. 恋愛の成就と代償としての彼女の死

“The Legacy”では語り手の体の中で女性の心臓が見つかるが、それは彼女から男性に心臓の贈与が行われたことを意味している。その奇想を元に、“Love’s All”以降、SaSs の物語は一人の女性への真剣な求愛に転調する。これまでの冷笑的な態度を反故にして、語り手は女性を相手にお互いの心臓を贈りあう(“changing hearts” 32)のではなく、それらを一つにすることで恋人になろうと説得する(“join them, so we shall/ be one, and one another’s all” 32-3)。互いに一を成す重要性はそのままに、“The Flea”で語り手は蚤の中で自分達の血が混ざること(“in this flea, our two bloods mingled be” 4)を結婚に準え(“This flea is you and I, and this/ Our marriage bed, and marriage temple is” 17-8)、自身が結婚を考える程真剣であることを示す。そして“The Ecstasy”で語り手はプラトニズムのアイデアを借用しながら、自分達の魂が結びつき(“when love, with one another so/ Interinanimates two souls” 41-2)、高尚な一つの魂(“abler soul” 43)を形成しているのだという壮大な比喩をもって、自身の恋愛が成就した喜びを表現する。Petrarch 的な恋愛詩を揶揄する為に浮気な恋を称賛していた語り手も、心から愛する女性と出会い、彼女と成熟した関係を築くまでに至っているのである。

しかし、“Love’s Usury”での愛の神との契約通り、“The Dissolution”で語り手は彼女の死に見舞われ、世界に価値を見出せなくなる(“She is dead: and all which die/ To their first elements resolve” 1-2)。彼女を失った悲しみ故に、語り手はこの詩の最後に自身の拳銃自殺を仄めかす比喩を用いる(“And o my soul more earnestly released,/ Will outstrip hears; as bullets flown before/ A latter bullet my o’ertake, the powder being more.” 22-4)。しかし晩年に愛の苦しみに耐えるという契約の通り、“A Nocturnal upon St. Lucy’s Day”で語り手は愛の神による錬金術(“love wrought new alchemy.” 13)によって生きる屍のように何度も蘇らせられ(“He ruined me, and I am re-begot/ Of absence, darkness, death; things which are not.” 17-8)、死ぬことが許されない。語り手は亡くなった彼女と早く会いたいと願うが故に、せめて彼女を身近に感じようと、一年で最も夜が長い St. Lucy’s Day を祝福するのである(“Let me prepare towards her, and let me call/ This hour her vigil, and her eve, since this/ Both the year’s, and the day’s deep midnight is” 43-5)。

このように、SaSs は構成する作品を特定の順番に並び替えることで、「手法を少しずつ変えながら何度も Petrarch 的な恋愛詩を揶揄していた語り手が、心から愛する女性と出会い、自身の恋を成就させるも、愛の神との契約の通りに彼女の死と言う苦しみを味わう」という一連の物語として読むことが出来るのである。

作品引用文献

Donne, John. *John Donne: The Complete English Poems*. Ed. A. J. Smith. London: Penguin, 1971. Print.

引用文献

Donne, John. *The Poems of John Donne*. Ed. Herbert J. C. Grierson. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1912.
 ——. *Donne; the Elegies and the Songs and Sonnets*. Ed. Helen Gardner. Oxford: Oxford UP Press, 1965. Print.
 ——. *The Complete Poetry of John Donne*. Ed. John T. Shawcross. New York: Anchor Books, 1967. Print.
 ——. *John Donne: The Complete English Poems*. Ed. A. J. Smith. London: Penguin, 1971. Print.
 ——. *The Songs and Sonnets of John Donne*. Ed. Theodore Redpath. London: Harvard UP, 1983. Print.
 ——. *John Donne’s Poetry*. Ed. Donald R. Dickson. New York: Norton, 2007. Print.
 ——. *The Complete Poems of John Donne*. Ed. Robin Robbins. Edinburgh: Longman, 2008. Print.
 ——. *21st-Century Oxford Authors: John Donne*. Ed. Seamus Perry. Oxford: Oxford UP, 2015. Print.
 赤松佳子『ジョン・ダンの修辞を読む』大阪、大阪教育図書株式会社：2009年。